

4 令和元年度に発表した病虫害発生予察情報

病虫害防除対策担当 笠巻 賢

今年度、病虫害防除所では、多発が予想され早めに防除措置を講じる必要がある病虫害として、継続的な対策が欠かせない「イネ縞葉枯病」と、特異な発生が認められた「果樹カメムシ類」について注意報を発表しました。また、秋冬ねぎほ場で被害が初めて確認された「ネギハモグリバエの別系統」について特殊報を発表しています。そこで、これら病虫害の特徴と防除対策などを報告します。

(1) 水稻、イネ縞葉枯病

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病です。本虫の越冬世代幼虫のウイルス保毒虫率が2年連続で増加し、またさらに4～6月が高温になるとの予報から多発生が予想されたため、本病の多発が危惧されました(写真1)。

育苗期の防除が徹底されたこともあり、収量に影響するほどの被害は確認されませんでした。発生面積は平年より多くなりました(図1)。このため発病リスクが高い状態が継続していると考えられますので ①育苗時の箱施用剤の施用 ②抵抗性品種「彩のきずな」、「彩のかがやき」などの作付け ③収穫後の早めの耕うん、畦畔や水田周辺のイネ科雑草の除去等の対策が重要となります。

(2) なし、果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ他)

果樹カメムシ類は、5月下旬の高温で飛来が急激に増え、予察灯でこれまでとは桁違いの誘殺数が確認され被害の多発が危惧されました。(図2、写真2)。

多目的防災網の未設置園では果実に被害が発生してしまいましたが、設置園では飛来を抑制するとともに適切な防除などが実施されたことから、被害は少なく抑えられました。しかし、7月下旬には再び平年の約10倍となる異常な誘殺数となったことから、越冬する成虫も多いと予想されます。このため、多目的防災網の設置や修繕などを実施して、来年の栽培に備える必要があります。

(3) ねぎ、ネギハモグリバエの別系統

県内では令和元年8月に、県北部の秋冬ねぎほ場で被害が初めて確認されました。ネギハモグリバエの従来系統と別系統を形態から識別するのは困難ですが、被害の様相は大きく異なります。従来系統と比較すると、1葉あたりの幼虫数が多い傾向があり、食害が進展すると近接した食害痕が癒合して白化したようになります(写真3、4、5)。被害発生やまん延を防止するため、①発生初期の徹底防除 ②被害葉、収穫残さは、ほ場内には放置せずにか所にとめて積み上げ、ビニール等で覆い裾部分を土で埋めるなど適切に処分する等の対策を実施してください。



写真1 イネ縞葉枯病発病株
(右上 ヒメトビウンカ成虫、体長約3.5mm)

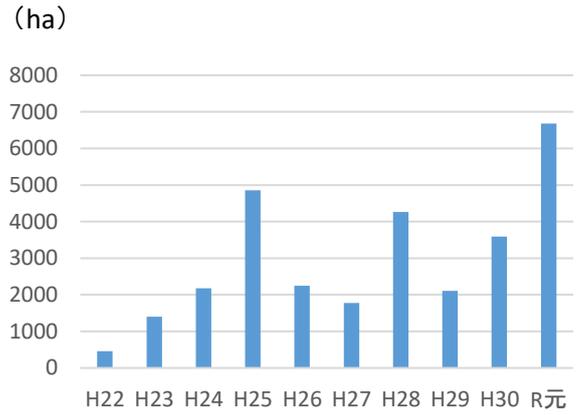


図1 県内のイネ縞葉枯病発生面積の推移

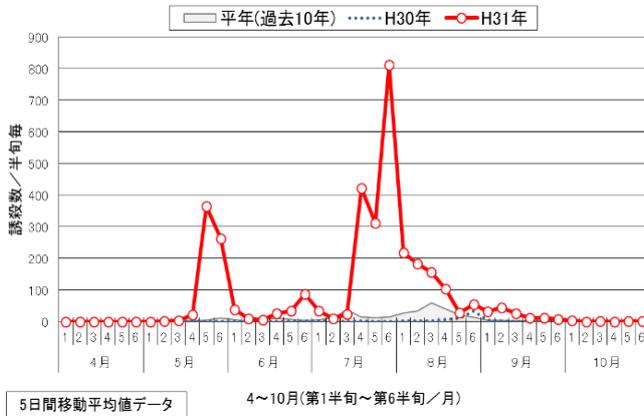


図2 果樹カメムシ類の誘殺消長(上里町)



写真2 フェロモントラップに誘殺された多量の果樹カメムシ類



写真3 ネギハモグリバエの従来系統による食害



写真4 ネギハモグリバエの別系統による食害



写真5 ネギハモグリバエの成虫

詳細は、病害虫防除所ホームページ
<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/b0916/>

